

会員の広場



六十の手習い—囲碁

廣中 聰 (東京)

自分にとって「六十の手習い」は、囲碁です。私の母は、ほけ防止に六十才になったころ、囲碁を始めたのです。付き添いのため郷里福山に帰ったのが、六十でした。母の相手を務めることができたらと、手習いを始めました。囲碁に関心を持つことにより、ぶつかったのが、木谷美春「木谷道場と七十人の子供た

ち」、小林光一「棋士ふたり」。昭和の名棋士木谷實の妻、美春が約七十人の弟子を自宅で實の子同様に気を配って育てた物語が前者。木谷實の娘禮子が13歳年下の夫、小林光一にあってた手紙と手記を中心にした物語が後者。美春は、信州のひなびた地獄谷温泉に育ち、たまたま来宿した實が見初め求婚。彼女は女学校すら通っていませんでした。結婚後、實は自宅に道場を開き、全国から囲碁の俊才を集めます。美春は、学校教育を含め生活全般の面倒をみつづ、弟子を平等に愛して「お母さん」と慕われました。何か起きるなら、わが子にと祈ったそうです。総勢約70人の木谷一門が囲碁界を先導した時代は長く続きました。大学に進学しなかった唯一の娘禮子が、

「二人の棋士」の主役の一人であり、囲碁への實の願望を継ぎました。北海道から12歳で上京した小林光一は、19歳ごろ、禮子と恋に落ち禮子に求婚します。美春ほかの猛反対の中、二人は意志を貫き、光一は、「もう打ち直しはきかない」岐路の一着を打ちました。結婚後、禮子は控えにまわり光一を支え導きます。光一は大活躍し「名誉三冠」に。ふたりの娘が、女流棋士の小林泉美。泉美の夫が、平成四天王の張栩です。そして最近二人の娘心澄、心治がプロ棋士になったことが話題になりました。實が望んだ五(碁)代の系譜が続くかもしれません。

さる中国人が、日本ではエリート教育はなく、リーダーを育てないと、もらしていきま

た。木谷道場こそエリート(英才)教育のモデルだったかもしれません。實は、手を取って教えるのでなく、俊才達を「黙って見守る」ことにより、個性を伸ばしたのです。余波と言えば、木谷家の7人の子供は、経済的に余裕なく、生活支援に駆り出された中で、男子全員三人が東大入学、女子も芸大、教育大、慶大に進学します。

囲碁に没頭、切磋琢磨する俊才達との共同生活がその背景・刺激となったものと想像します。

私の手習いはまだ続いています。手ほどきは福山の老人大学の囲碁部で受けました。60才からでは伸びないよとの先輩の辛口は的を射ていましたが、楽しんでいきます。